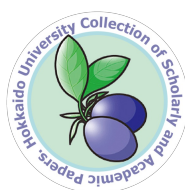




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	田中義麿日記『未央手記』に見られる有島武郎との交流
Author(s)	中村, 建
Citation	北海道大学大学文書館年報, 20, 1-18
Issue Date	2025-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94784
Rights	(c) 2025 Hokkaido University Archives
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_01.pdf



< 論 文 >

田中義麿日記『未央手記』に見られる有島武郎との交流

中村 建

はじめに

東北帝国大学農科大学予科教員時代¹⁾の有島武郎については、就職・結婚・『白樺』への参加・札幌独立教会からの退会・妻の発病による離任など「作家生活に出発するまでの内外の諸問題が含まれている」（瀬沼茂樹）²⁾にもかかわらず、1909年から1915年頃までのまとまった日記が現存しない³⁾。そのため、その間の足跡を辿るには本人の書簡や、当時親交のあった人物による回想録などの記述を参照するほかないのが現状である。主な回想録としては、大学の同僚であった吹田順助の『旅人の夜の歌』（1959・1、講談社）、教え子であった原田三夫の『思い出の七十年』（1966・3、誠文堂新光社）、同じく教え子であり、有島の小説『星座』（1922・5、叢文閣）の園のモデルとされる鈴木限三の『白聖校舎の新しきころ』（1970・10、新樹社）などがよく知られている。

東北帝国大学農科大学出身の遺伝学者・田中義麿も後述する通り、当時の有島を回想した文章を残している。しかし、『有島武郎事典』（2010・12、勉誠出版）において田中は立項されず、有島との関係については、これまでほとんど注目されてこなかった。その例外が、佐々木さよによる研究である⁴⁾。すなわち、有島の1914年2月6日付足助素一宛書簡の、「この間田中と小熊がやつて来たので一寸会心の話をした。科学といふもの、領分をいくらか確め得た様に思ふ」⁵⁾という記述を踏まえて、有島の小説『宣言』（1917・12、新潮社）が生物学、特に進化論や遺伝学、突然変異説⁶⁾を題材としている背景に、田中義麿や小熊捍⁷⁾のような研究者がいたことや札幌でダーウィン『進化論』出版50周年記念晩餐会の開催があったのではないかと推察するものであった。

2017年、田中の生涯に互る日記を初めとする「田中義麿関係資料」が遺族により北海道大学大学文書館に寄贈された（以下、「田中義麿関係資料」と注記したものは全て北海道大学大学文書館所蔵のものである）。この日記のうち1903-1916年のものが『未央手記』と題されて5冊に製本されており、現在同館の山本美穂子氏の下に翻刻・注釈が進行中である⁸⁾。結論から言えば、『未央手記』の記述は、これから論じるように、前述の佐々木の推察を裏付けるものであると言える。

田中は『恵迪寮史』（1933・11、北海道帝国大学恵迪寮）に寄せた「寮の命名当時」で、恵迪寮の寄宿舍係としての有島武郎について次のように回想している。

あの高雅な風格と真摯そのもの、やうな態度を以て、開識社例会での講演や、係室での坐談や、また朝夕の起居動作に於て、舎生に深い敬慕の念を刻みつけられた。一見冗員のやうに見える寄宿舍係なるものが、その実大きな役目を勤めてゐたことは当時の日記が雄弁に物語つてゐる、世の中にはこれに類することが相当多くはないかと考へられる。⁹⁾

この記述の通り、『未央手記』には有島との交流に関する記述が数多く見られる。また、有島の心中自殺直後の追悼文「或る時代の有島さん」（『文化生活』記念増大号、1923・9）で田中は、教員時代の有島と田中ら学生が宗教や科学をめぐって論争したと有島の教会退会とが「可なり密接な関係」¹⁰⁾にあったとの噂を耳にしたとも書いている。これを裏付けるように有島自身も、キリスト教から離れるに至った経緯を告白した「第四版序言」（『東方時論』1919・2-4）において「基督教の攻撃をする若い学者などに遇ふと頻りと其の弁証に努めたりなどしてゐた」¹¹⁾ものの、最終的に教会退会の意志を明らかにすることにしたと述べている。

本稿では、有島の東北帝国大学農科大学予科教員時代に該当する田中日記「未央手記Ⅱ／1907年1月1日-1909年4月19日」（田中義麿関係資料0002）、「未央手記Ⅲ／1909年4月20日-1911年12月31日」（同0003）、「未央手記Ⅳ／1912年1月1日-1914年12月31日」（同0004）、「未央手記Ⅴ／1915年1月1日-1916年12月31日」（同0005）の分析を通して、公私に互る田中有島の交流の実態を明らかにする。その上で、田中と交わされた宗教・科学に関する議論と有島の教会退会との関連および、有島が田中から進化論・遺伝学を受容した可能性について考察する。なお、『未央手記』Ⅳまでが横書きで、Ⅴが縦書きとなっている。日記の解説・翻刻は筆者による。

1. 田中義麿の学生時代

1-1. 有島武郎と田中義麿の交流前史

田中義麿は1884年、長野県東筑摩郡片丘村（現・塩尻市大字片丘）に生まれ、長野県松本中学校（現・松本深志高等学校）を卒業後、一年志願兵を経て1903年9月札幌農学校予修科に入学、1905年9月本科に進学した。同校の東北帝国大学農科大学への改組後の1907年9月には寄宿舍委員長を命じられた。1908年1月、予科の英語教員として赴任した有島武郎と出会った。田中はすでに本科生であったことから直接有島の講義を受けることはなかったものの、寄宿舍（恵迪寮）や学芸部（学内の文化系の団体）などで交流を深め、卒業後は同僚として交際した。なお、有島は1908-1910年度に学芸部部长を、田中は1904-1909年度に学芸部幹事（1907年度は主任）を務めた。

田中は1909年7月に東北帝国大学農科大学農学科を首席で卒業して母校の助手となり、同年12月から1910年10月まで寄宿舍係を務めた。1911年助教授に昇進し、1913年には独立

の課目としては日本初の遺伝学の講義を開講した。この間予科の動物学の講義・実験も担当している。1917年、*Genetic Studies on the Silkworm*（『蚕に於ける遺伝的研究』）¹²⁾にて農学博士号を授与された。その後、海外留学を経て九州帝国大学に移り、定年後は小熊捍が所長を務めた国立遺伝学研究所にて研究を続け、1972年に歿した¹³⁾。

前述のような在学中の立場から田中は、有島の札幌農学校の同期であり友人の森本厚吉とも交流を持っていた。すなわち、1907年9月22日の舎生臨時総会にて田中は寄宿舎委員長として、森本の帰国および結婚にともなう寄宿舎係離任の「歓迎兼送別」の挨拶をした。10月4日には森本の新居を探し、その翌日には学芸部例会にて森本の旅行談を聞いた¹⁴⁾。その後も、晩餐に招待されたりするなど、森本との交流も続いている。

1-2. 寄宿舎での交流

『未央手記』において有島武郎に関する記述が最初に登場するのは、有島の札幌赴任から4日後の、1908年1月8日である。この日田中は、森本厚吉宅に同居していた有島¹⁵⁾を訪れて、学芸部例会での演説を依頼した。翌日、有島の「流暢ではないが重々しい口調で且文学的趣味に富んだ」イタリア滞在時の話と「各国人氣質の比較談」は、「頗愉快」に聴けたという。18日にも森本宅を訪問し、有島らとともに「独立教会二十五年祭に使ふと云ふ葡萄の葉」の彩色と切り抜きを手伝った¹⁶⁾。なお、この1月から有島は学内で行われていた社会主義研究会に出席し、当局からの警告により同年10月に同会は消滅することになるが、『未央手記』にはこの団体に関する記述は見られない。

3月19日、有島は寄宿舎係として恵迪寮に移り、これ以降田中と交流を深めていく。翌日の夜には「有島先生の室に語ること数十分」、24日には当時有島が愛読していた座古愛子『伏屋の曙』（1906・11、警醒社書店）を借りて読み、涙を流した¹⁷⁾。26日にはダンテの『神曲』の挿絵などについての説明を聞き、自室に戻って就寝したのは12時近くになった。27日付の日記には、田中が作詞した明治41年寮歌「太虚の齡」完成までの経過が記され、最終的に「有嶋先生ママの校閲を経た」という¹⁸⁾。翌日、寮歌の発表とともに行われた第34回開識社例会（学芸部主催の演説会）で有島がアメリカ留学中の学生生活について話し、田中は「彼らの寄宿舎生活の如何に楽しく痛快なるべきかを思ふと転々欽望の情に堪へなかつた」¹⁹⁾。29日には、有島の発起によって、全33名による藻岩山での雪滑りに出かけて大いに楽しんだ²⁰⁾。この出来事は田中にとって非常に印象深かつたらしく、前述の「或る時代の有島さん」および「寮の命名当時」にも記されている。

その後有島は寄宿舎係を解かれて10月10日に北2条東3丁目（現・北2条東7丁目の道路）の家に転居した。この間田中は7月から9月にかけて第一種勤務演習のため近衛歩兵第二連隊に召集されていた。そのためか、翌年6月14日に有島宅の晩餐に招待された際、結婚したばかりの安子「夫人のお給仕で五目ずし」を「御馳走」になったことに加えて、安子の父・神尾光臣（現・長野県岡谷市出身）が「昨年召集中旅団長として近衛の第一旅団に居られ昇進して今は第十五師団長をして居らるゝ」という記述も見られる（なお、有

島も田中と同様に一年志願兵を経験していた)。

1-3. 通俗学術講話会の準備

1908年12月29日、田中は学芸部主催の通俗学術講話会の相談のため、学芸部部長の有島宅を訪問した。この日の日記には、雑誌『ホトトギス』や『朝日新聞』に連載中の夏目漱石『三四郎』などを読んだ感想が記されている。『未央手記』にはしばしば文学作品への感想も記され、読書記録としても興味深い。なお、有島武郎は1910年に『白樺』創刊に参加して作家活動に入っていたが、『未央手記』には有島の作品についての感想は見られない。また、同日の日記には田中の弟・正実の絵に対する有島の、「技巧は年齢に比して充分なりと思ふ たゞ esthetic の趣味に於いて欠くる所有らざるか」、「図案、意匠等の方面」に向かえば成功する、との評も記されている。

翌1909年の元日にも大学での教育勅語奉読の式典の後、実験室で有島らと講話会の相談をした。同日夜に他の学生とともに田中有島宅を訪れた際、有島の友人で札幌農学校卒業生であり、当時貸本屋「独立社」を営んでいた足助素一にも出会った。講話会は、1月18日、19日に豊平館に有島の司会の下開催され、日記からは非常な盛会であったことが窺える²¹⁾。

1-4. 宗教・科学をめぐる議論

1909年2月27日、寄宿舎の演説会・思斉会が開催された。この中で田中は「倒れんとする大厦」という題で、科学とりわけヘッケルらの攻撃によりキリスト教の命運は尽きようとしている、社会的事業により今後数世紀は続くと思われるものの、その精神は早くに減んでいる、と演説した。田中は翌月発行の『文武会々報』に掲載された「生」²²⁾という文章において、生命が宇宙万物に共通のものであるというヘッケルの生物学的一元論を援用してキリスト教を初めとする宗教を否定し、科学的であるべきだと説いており、この日の演説においても同様の主張がなされたと思われる。田中の演説の後、有島は「崇拜を廃めよ」という題で登壇し、「自己中心の声を聞き、完全なる自己を育成すること」を説いた。田中の主張に対しては、「宗教と科学とは全然不可犯領域を有す」として、科学では覆いきれない領域があると反論した。これに対して田中も反論しようとしたものの、「時間も遅くなりたるため見合」せた。

そこで、3月13日、「小熊捍君といつか有島先生の宅へ押しかけて大に論戦しやうではないかと約した」のを果たすため、田中と小熊は有島宅を訪れた。この時、有島はまだ遠友夜学校（新渡戸稲造が設立し、有島も代表を務めた夜学校）から帰ってきておらず、当時有島宅に同居していた吹田順助（号・蘆風）を相手に、小熊が主張していた、死は生命の本能であるという説²³⁾について議論した。そこに有島が帰宅し、死を恐れるのも望むのも生死の問題に執着しているのだから死の本能があるというのはおかしいと述べ、この問題はひとまず片付けられた。そこで、先日の思斉会での議論が再開された。その内容は日

記に次のように記されている。

まづ第一に先生の抱懐する“神”の觀念なるものを尋ねると

吾々の眼に触るゝ限の宇宙の森羅万象は一定の法則を有し且一定の目的を有するものゝ如く見ゆる 而して其の変化は退歩とは思へない 即ち進化である 倫理的に観るならば善である 即宇宙全体は善なる目的を有する意志の発現である

と

然らば何故に此 Will は驀然直に究竟の目的に向つて進まぬのか、何故此目的に対して妨害となるべく信じらるゝ種々の現象が起つて来るのかと問へば

既に Will itself である以上は直に究竟の目的に向つて進むも又は迂路を採つてユックリ進むのも其の自由勝手である

又吾々が不完全だ不合理だと思ふ事でも夫が真の不完全不合理でなくて其の欠陥を填めるべき他のものを観るを得ないのかも知れぬ

此の答は確かに一種の詭弁と言はねばならぬ 最初一定の目的に向つて進むから Will であると言つておいて今は Will であるから勝手な道を進むのだといふ 其処に矛盾がありはせぬか 又後段の invisible existence に関することも大なる独断と言はねばなるまい

併し此の時は頭が熱して居たせいにか此矛盾、独断を空しく聴流したのは遺憾である 一例として祈禱の事を以て攻めると

祈禱は必ずしも其の効果を期待して為すものではない 止みがたき渴仰、憧憬、煩悶等の情の溢れて自ら口に発するものである

飢えたる者が飯の食へるか食へぬかわからぬが“あゝ飯が食ひたい”と叫ぶのと理は一である

所謂自然法と神との關係を求めると

今の Science で言ふ Natural law なるものをズーッと拡張したら即広義の Natural law は即予の God である

今迄黙した吹田蘆風氏突如として曰はく

僕は若神を信ずる人だつたらそんな神では満足されないな もっと人格的な且もっと自由な即 Natural law itself でなくて Natural law を支配する Super natural のものでなくてはならぬと思ふ

要するに有島先生の今夜の宗教観は甚だ refine した且甚控へ目なものである 宗教とは言へ余程科学（哲学）に接近した処がある 従つて理性は承認するかも知れぬが純粹の宗教的情熱、安心は或は少ないかも知れぬ 先生自ら常に不安を感じることが有ると言つて居られた

有島は田中の質問、さらには吹田の意見に押され気味であつた。このような議論がなさ

れたためか、前述の吹田の回想録には札幌時代の在学生で記憶に残る人物の一人として田中と小熊の名が挙がっている。

この日の有島の、「常に不安を感じることが有る」という発言は、翌年の教会退会を予期させるものである。しかし、有島はなおもキリスト教（宗教）の弁護に務め、4月24日の開識社例会で「宗教と科学」という演説を行った²⁴⁾。宗教は古来、今日の進化論を初めとする科学の側から幾多の打撃を受けてきたものの、宗教にとっては幸福な結果となった。すなわち、宇宙における現象を科学的に説明することはできず、神という存在によって初めて理解できるものであり、進化論を基礎として新しい宗教観を立てるべきだ、という内容であった。これに対して田中は次のように反論した。

1. 先生は其演説中に三度立場をかへられたこと
2. 其の第二の立場即宇宙の現象は Evolution で説明の出来ないことが多く例へば O と H とが化合して水となるのは進化といふよりは寧 Occasion と云ふ方が穩当であると云ひ matter と spirit との両立を認められたのは今の科学でも之を否定するに足ると
3. 第一及第三の立場は先生の真意なるべきか
宇宙に秩序あり法則あるが故に目的あり意識あり智力ありと断定せられたのは早計にして秩序、法則の有るのが即自然であつて秩序、法則のないメチャクチャの現象、作用といふものは存在せざること即超自然的實在なるもの、積極的説明は不可能なること
水の低きに就くは何時何処にありても必然の法則なれど之を以て水に意識ありとは言へざること
4. 飢ゑたる者が土や炭を食つて一時の苦痛を凌ぐと即土や炭を人類の食物とは言へない如く宗教が一時人心に安心を与へるからとて直にそれが真理だとは言へないこと

これに対して有島はさらに弁解するも、「時間も晚くなつたので」他の議論に移り、結局この宗教と科学をめぐる議論に最終的な決着は付かなかつたようである。先に挙げた追悼文で田中は、自身との議論と有島の教会退会が「可なり密接な関係」にあったという噂を耳にしたと述べていたが、この日記はそのことを裏付けるものである。これに関して田中は「噂」以上の内容を知っていたにもかかわらず、あえて文章に書かなかつたという可能性もある。

1-5. 『文武会々報』の編集

有島と田中が属した学芸部が発行していた雑誌『文武会々報』（文武会は学内の文化系と運動系の団体を束ねた組織）の編集会議についての記述も見られる。例えば、1909年5月15日に行われた有島宅での会議では、原稿が集まらなかったために締切を延ばす相談や、有島が「英国の“Review of Review”の主筆 Stead の政界との通信」に関する雑談をし

た。6月19日には大学創立第二回記念式における田中の学生生徒総代の祝辞の校閲を有島に依頼した旨とともに、有島から「本日発行の文武会々報に登載せる飯塚君の新体詩に就いて相談あり 近來学長御機嫌甚斜なる折柄彼種の詩が或は一問題を惹起するなきかを恐ると云ふにある」との記述がある。なお、この飯塚直彦の詩「刹那」²⁵⁾は、その後問題にはならなかったようである。この時期の『文武会々報』には、有島の「ブランド」(57、1909・6-65、1912・4)を初めとする教員による西欧文学の紹介²⁶⁾、前述の飯塚の詩などの学生による文芸が盛んに掲載されていた。

2. 田中義麿の教員時代

2-1. 『東北帝国大学農科大学』の編集

1909年7月、田中は東北帝国大学農科大学を首席で卒業し、母校の助手となった。前述の『文武会々報』の編集の関係から、田中は有島とともに大学の案内書『東北帝国大学農科大学』(1910・5、富貴堂書房)²⁷⁾の編集・執筆に携わることになる。同書は、田中も受験期に買い求めて愛読していた²⁸⁾札幌農学校学芸会(編)『札幌農学校』(1898・6、裳華房)の後継にあたり、構成も類似している。11月9日、田中は同書の出版の相談のため有島宅に呼ばれた。会議後の雑談について「学芸部の幹事会の特色は其の何となく一種の文学趣味を帯ぶるの点にある」と述べ、さらに藍野祐之、加藤茂雄とともに残って有島と「絵画」について語った。

このように大学案内の本の編集作業が始まった直後、ある事件が起こった。11月23日、豊平館で開かれた秋季職員懇親会送別会兼歓迎会において佐藤昌介学長が送別・歓迎の対象者一人一人の名前を挙げて挨拶した際、新たに助手となった田中に言及しないままに終えてしまった。「サア何うも面白くない」と田中は機嫌を損ね、幹事の有島がなだめるのを振り切って帰宅した。その翌日、田中の許を訪れた有島は「学長もひどく悪いことをしたといはれ」たと伝えた。田中も「時間に後れて往つたり礼服を着なかつたりした」落ち度があったと反省し、「昨夜は少し心持が悪かつたがもう何ともないから」と有島を「安心」させた。同日夜、有島が参加したかは不明であるが、商業会議所にてダーウィン『種の起源』出版50周年記念晩餐会として、遺伝学や進化論に関する講演会が行われた²⁹⁾。

その後、12月18日、翌1910年1月29日、2月3日にも有島宅で編集に関する打ち合わせが行われた。このうち、1月29日は自身の担当部分の原稿執筆と動物学講読会(動物学に関する文献の講読会)の新年会のため田中は欠席し、「此夜有島氏宅の編輯会議は徹夜で原稿の通読并に訂正をやつたとは翌日になつて聴いた」という。5月26日には完成した見本刷のうち田中が執筆した第8章「本学と北海道」のほか第9章の一部「寄宿舎生活」、有島が執筆した第1章「本学の過去」を読んだ。また、同日の日記の末尾には「有島氏は独立教会を脱会されたさうな」との記述もある。有島は同月15日に同教会日曜学校長の辞意を表明したが、『未央手記』における有島の教会退会に関する記述はこの一文のみであ

る。

このほか、同時期の特徴的な記述としては、1910年2月16日の出来事が挙げられる。田中が『読売新聞』に連載中の島崎藤村『家』を読み、図書館に行ったところ、有島が「昼食のパンを噛つて居た」。そこで、有島は田中の「宗教は芸術なり」という説を批判した上で、「真に人生を感得するには（comprehend）理智だけでは不十分だ」と主張した。田中は、当時愛読していた井上円了『哲学新案』（1909・12、弘道館）を紹介するなどして、「思はず二時間許」も有島と話し込んだ。また、4月21日には小熊、大石泰蔵、藍野とともに有島宅での晩餐に招待され、「哲学、科学、文学、美術等」について語り合った。「有島さんの家へ来るといつでも十一時過ぎになる」という記述からは、田中の有島宅への来訪の頻度の高さと有島への敬愛の念が窺える。田中の結婚後も、二人の交友は続いた。

2-2. 田中の結婚後の交流

1910年2月から、同郷の河野常吉夫妻を介して田中の縁談が始まった。11月1日、田中は、鷺見邦司の長女・ゆか子と豊平館にて結婚披露宴を挙げ、有島もこれに招待された³⁰⁾。邦司は岐阜県出身で十勝地方の開拓に尽力した人物として知られ、当時は北海道殖産銀行不動産貸附課長の地位にあった。

結婚直後の11月12日、田中夫妻は正賓として、上白石に移った有島の家、吹田夫妻、有島の友人の原久米太郎夫妻、小熊とともに招待された。この日は、当時話題になっていた千里眼事件、有島や小熊が創設に携わった大学の美術部・黒百合会、絵画が話題に上がった。なお、当時小熊は千里眼事件について盛んに評論を発表していた³¹⁾。

その翌日、田中は妻の弟・瑞穂とともに札幌女子小学校にて開催された黒百合会第3回展を観た。東北帝国大学農科大学予科を中退して第八高等学校に入学した原田三夫の作品が多かったことや、「有島さんの肖像画二面（クロボトキン、日盛）」（日盛は大石寺の第53代法主）などが田中の目を引いたという。なお、この第3回展覧会に展示された「暮れつゝある海？」³²⁾の絵を観て、「生れ出る悩み」（『生れ出る悩み』1918・9、叢文閣）のモデルである木田金次郎は有島を知ったという。『未央手記』には、翌年以降も黒百合会の展覧会を観に行った旨の記述がある。

翌1911年3月17日、田中は小熊とともに有島宅に来遊した。その折、「東京に岡田といふ人が有^{ママ}り」、「患者をあつめて一種の催眠術で患者を不意識的運動をさせそれで病気を治さうだ 大石（泰蔵）君も伝授を受けて来たといふ」と、当時流行した岡田式静坐呼吸法を開発した岡田虎二郎が話題に上っている。その後、有島もこれに熱中し、同年11月3日に有島が長男・行光（後の俳優・森雅之）を伴って田中宅に来訪した折、「足助君が「神になつた」話」とともに同呼吸法の「奇瑞」について語り、16日には大学の田中の控室を訪れて、実演している。また、この3月17日には、「小熊君が自覚といふものは自体を構成する細胞の自意識の総計だといふのに対して僕は反対説を主張する」、と学生時代と同じように科学に関する議論を戦わせた。このような会話の中で、有島も科学に関する

知識を吸収したと思われる。なお、この前年から田中は動物学講読会にてウィリアム・ベイトソンの *Mendel's Principles of Heredity*（『メンデルの遺伝の法則』）を講読しており、同時期の日記には同書を読んだ旨の記述が頻繁に登場している³³⁾。

同年5月、『白樺』同人の武者小路実篤が一月ほど札幌に滞在した折³⁴⁾、27日に田中は有島宅に武者小路を訪ねた。その場には、森本、吹田、小熊、大石がおり、「携へ往きたる“同人”を紹介」した。「武者君は大に絵に興味を有し画帖やら一枚画やら絵画の雑誌（“Die Kunst”）を取散らかしたる室内は宛然百花の爛熳たるが如」き状況だったという。

有島と田中は休日に共に外出したりもしている。6月11日（日曜日）、田中は有島、吹田、足助と共に苗穂の鉄道工場に行き、鉄道局に勤める原久米太郎の案内で見学した。その中で、同年8月に行啓した皇太子（後の大正天皇）のために設えた御料車の「室内に入りて便所の中までも覧」た。また、1881年に明治天皇が行幸した際に乗車した「黄色」い客車（開拓使号³⁵⁾と思われる）の内部も見学し、「腰掛けはすべて American style なり」と有島が言ったという。

10月8日（日曜日）には、「バーバー」というかけ声による心霊治療・「人身自由術」を行っていた浜口熊岳が新善光寺に滞在中³⁶⁾とのことで、有島と田中の二人で見学した。集まった多くの患者一人一人に、「二三遍「バァ」だか「パァ」だかをやる」姿を見た二人は、「高圧的な彼の氣勢に依つて「治つた」といふ暗示を高度に有効にする」もののだとか「解釈の方法がなかつた」。前述の千里眼事件と並んで、当時の超心理学的な事柄への関心の高さが伺える。その帰途、有島は同年7月21日に誕生した田中の長男・克己を見に家に寄り、田中は有島から「函館のトラピストの話など」を聴いた。

このほか、学生への対応において有島に協力を仰いだ旨の記述もある。同年10月12日田中は塩沢という同郷の生徒³⁷⁾から、予科を続けて落第したために選科に進むも親の反対を受けて再び予科に戻りたいと相談を受けた。翌日、田中は森本厚吉に掛け合うもうまくいかず、17日に有島や佐藤学長にも相談した結果、塩沢は情願書を出して予科に復学することができた。

2-3. 文化・思想面での交流

学生時代ほどではないものの、田中の就職後も、文化・思想面での有島との交流が続いていたことが、日記から窺える。1912年4月、恵迪寮の雑誌『辛夷』が発刊され、以後5号まで継続した。3月14日、田中は「第一号に何か書いて呉れ」と言われて「生物学的寄宿舎観」³⁸⁾という評論を書き始めたところ、有島が来訪した。その中で、「貧民は不思議に都会の」東京に集まるとい言葉が田中の「注意を惹」いた。なお、有島も同誌の第1号にホイットマン詩の翻訳「友よ」を寄稿している。

9月29日、田中は有島宅を訪れ、同年10月に開催された黒百合会の展覧会の参考作品として、『白樺』から借りてきたロダンの彫刻とデッサンを「覽せて貰」つた。また同日、有島はベルクソンの哲学について語り、大学の図書館にも *Time and Free Will*（『時間と自

由意志』の英訳)が入ったことが記されている。当時、有島はベルクソンに傾倒しており、翌1913年3月1日にも学芸部でベルクソンについて講演し³⁹⁾、田中もその後半部分を聞いた。また、予科の遊戯会(運動会)準備のため臨時休業となった5月2日には、有島が田中宅に来訪した。二人は「新思潮の勃興等に就いて語」り、「現代青年が思想上の中心を失ひて或は彷徨し或は妄進の状寧悲惨なるもの有るを嘆じて共に慚然たること久し」と田中は感想を記している。また有島は、「道義家が今尚忠君といふ旧き形式を以て今の時代を律せんとする」とした上で、親の子に対する愛情は自然である一方、子が親に孝行するのを強いるのは自然ではない、と論じたという。有島は離札後の1915年11月16日付の末光信三(同年東北帝国大学農科大学予科英語講師として着任)宛の書簡で「文部省之教育方針」により「厳密に製造されたる青年は成業の後数年にして發育力に失ひ去るべき運命を与へらるゝものと存候」⁴⁰⁾と述べている。この日の田中との談話においてもそのような文部省の方針への批判が語られたのかもしれない。

2-4. 英語論文の添削

1913年頃になると多忙のためか、日記の記述も少なくなる。その中で有島については、英語論文の添削の依頼という形で言及されている。2月に学内の遺伝学の研究会「面出(メンデル)会」を立ち上げ、9月に遺伝学の講義を始めた田中は、蚕の遺伝に関する論文執筆も進めていた。6月16日、田中が1911年に論文⁴¹⁾を発表した際に英文校閲を行った、北星女学校教員のウェストン・ジョンソンに論文の添削を頼もうとしたところ室蘭への旅行で不在だったため、有島宅に行き依頼した。そこで、大学予科の英語講師であるゲール・クリーランド(1911年8月から1914年7月まで在任したアメリカ人)に見てもらおうと言った有島に原稿を預けた。18日、クリーランドが「訂正」した原稿を有島から受け取り、「今後はClelandに見て貰はうかとも思ふ」ものの、その後も有島に添削を依頼することになる。7月26日、前月に添削を受けた第一論文、“A Study of Mendelian Factors in the Silkworm, *Bombyx mori*” (「家蚕に於ける遺伝質の考究」)⁴²⁾ および “Gametic Coupling and Repulsion in the Silkworm, *Bombyx mori*” (「家蚕に於ける遺伝質のカップリング及レパルションに就て」)⁴³⁾ という2本の論文を海外に発送した。9月からは生殖細胞の配偶子に関する論文、“Occurrence of Different Systems of Gametic Reduplication in Male and Female Hybrids”⁴⁴⁾ の執筆を始め、翌1914年1月に完成させた(この論文については、英語の添削を受けた旨の記述はない)。これをドイツに留学中の田中の恩師・八田三郎宛に発送し、後に同地の雑誌に掲載された。1月から2月にかけて有島から第二論文、“Further Data on the Reduplication in Silkworms” (「更に蚕に於けるレデュプリケーションに就て」)⁴⁵⁾ および第三論文、“Sexual Dimorphism of Gametic Series in the Reduplication” (「生殖細胞式の雌雄二型」)⁴⁶⁾ の添削を受けている。この添削の過程においても、有島が遺伝学の知識を受容した可能性が高い。この間、2月3日に田中が「第三論文の校訂を依頼」するため、北12条西3丁目に新築した家に有島を訪れた際には、「哲学、宗教、人事」について

10時頃まで語った。なお、「或る時代の有島さん」には、この時期に有島の家「二階の北向の書斎で『君は哲学をやつてはどうです』と言はれ」、「何か不徹底な小賢しい返事をした」⁴⁷⁾との記述がある。

2-5. 有島の離札後

1914年11月24日、有島は結核を患った妻・安子の転地療養のため、一家を挙げて東京の実家に移った。翌年3月に東北帝国大学農科大学を休職するとともに家を引き払い、有島の札幌での教員生活、そして田中との継続的な交流も終わりを迎えた。1916年8月2日、安子は死去した。5日、農商務省蚕業試験場福島支場に滞在して蚕の研究を行っていた田中は、新聞で安子の死亡広告を目にした。「一進一退して居つたが矢ッ張いけなかつたと見える、連想はすぐゆか子の上に移る、あゝやつてブラ／＼して居る中に何かに躓いたらと云ふ様な気がする」と、当時入退院を繰り返していた自身の妻の身の上を案じた。なお、この先の時期は本稿で扱う範囲ではないものの、1923年の日記「当用日記／1923」（田中義麿関係資料 0022）を確認すると、有島の心中自殺への言及は一切ない。7月22日に「『文化生活』有島武郎記念号への寄稿「或時代の有島さん」を発送する」との記述があるのみである⁴⁸⁾。この追悼文は、次のように締めくくられている。

有島さんの今度の行動について私は何等の批評をも加えるつもりはない、併し之につけても、動機も径路もまして表面に現れざる事情も知らずに新聞の上で承知した位の程度でありながら、人の行為の結果だけを見て自由に批判することの出来る人たちの度胸と自信とに感服しないでは居られない。死んだ有島さん自身はさういふ風格の人ではなかつた。⁴⁹⁾

心中自殺を遂げたことで批判され、あるいは当時続発した恋愛事件⁵⁰⁾の一つとして消費された有島を、擁護するような内容となっている。有島の友人であった森本厚吉が主催した雑誌『文化生活』への寄稿とはいえ、この一文からは、田中がいかに有島を敬愛していたかが窺える。

3. 有島武郎研究における『未央手記』の意義

ここまで、『未央手記』における有島武郎に関する記述を通して、有島と田中の交流について概観した。有島武郎、特にその東北帝国大学農科大学予科教員時代を考察する上で、田中義麿『未央手記』の意義を次の三点にまとめることができる。

その第一は、学生・同僚から見た大学教員としての有島の姿が詳細に記述された同時代の資料であるという点である。田中の目を通して、寄宿舎係としての学生との交流、雑誌『文芸会々報』および学校案内『東北帝国大学農科大学』の編集および通俗学術講話会の

司会といった学芸部での仕事、黒百合会展への出品、懇親会送別会兼歓迎会の幹事といった調整役としての有島の活動を垣間見ることができる。また、岡田式静坐呼吸法の実践や心霊治療の見学といった、この時期の有島の興味の一端を窺うことができる。従来、有島武郎研究において、この札幌での教員時代は、教会退会、有島が参加した社会主義研究会への当局の監視など、作家活動へと向かっていく有島の変転を示すような出来事が注目されてきた。その一方で、『未央手記』における有島は、学生に慕われる教員として、あるいは調整役として活躍する同僚として記述されている。ここからは、有島を良き教員（あるいは先輩）・同僚として記述しようとする田中の意識が伺える。『未央手記』にはさまざまな文学作品の読書記録がある一方、有島の作品への言及がないのもそのような意識によるものと考えられる。

その第二は、田中との論争が、有島の札幌独立教会退会に影響を与えた可能性が示唆されている点である。先にも挙げたように、有島は「第四版序言」で、「若い学者」からキリスト教への攻撃を受け、その「弁証に努めたりなど」していたと述べていた。『未央手記』から、この「若い学者」が田中義麿であり、その議論の内実が明らかになった。有島とキリスト教との関わりについて論じた川鎮郎によれば、有島は、遅くとも札幌に赴任した1908年にはキリスト教の信仰から離れていたという⁵¹⁾。また、同時期の有島の自然観について論じた宮野光男によれば、有島はキリスト教から離れつつも、その神に類似する存在として自然を、「人間の意志とは無関係に人間に働きかけるところの意志を持った存在」⁵²⁾として捉えていたと論じている。これらの指摘は、1909年に有島と宗教をめぐる議論した田中の、「有島先生の今夜の宗教観は甚だ refine した且甚控へ目なものである宗教とは言へ余程科学（哲学）に接近した処がある」という記述が裏付けることになった。また宮野が、有島の科学観について、科学的な方法が人間を啓発した点については評価しつつも、それによって人間の「個性の自由にして無限の拡大を」⁵³⁾ 阻害したと批判するものだったとまとめるように、有島が科学に対してアンビヴァレントな態度を示していたことはつとに指摘されている。すなわち、妻の死因を確定すべく解剖を行う病理学者を題材とした「実験室」（『中央公論』1917・9）などの小説、「惜みなく愛は奪ふ」（『惜みなく愛は奪ふ』1920・6、叢文閣）を初めとする評論においてこのような見解が示されている。このような態度は、作家となる以前の教員時代においても同様であったと言える。ただし、『未央手記』には教会退会以前の有島と田中との宗教をめぐる議論に関する記述はあるものの、前述のように退会そのものについては「有島氏は独立教会を脱会されたさうな」という一文があるのみである。後年の追悼文にも田中との議論と有島の退会に「可なり密接な関係」があったという噂を聞いたという記述に留まっている。もちろん、二人がその後宗教について一切議論しなかったという可能性も存在するが、田中が有島について何らかの重要な事柄を知りつつも、あえて書かなかったという可能性も考えられる。

その第三は、有島の進化論・遺伝学の受容への田中の関与の可能性が高まった点である。『未央手記』の記述は、有島が、田中を初めとする生物学者から進化論や遺伝学を受

容したとする佐々木さよの考察を強く補強するものであった。有島は「惜みなく愛は奪ふ」などで、ド・フリースが提唱した突然変異説を人間論に援用し、突然変異のように人間の内部に衝動が生じることで個性が創造されると説いた。また、『宣言』には、動物相における突然変異を立証しようとする生物学者が登場する。『未央手記』の記述を見る限り、田中は突然変異を人間の個性の創造の原動力とは見なしていない。ただし、博士論文およびこれを元にした著書『蚕の遺伝と品種改良』（1917・7、大日本蚕糸会）で田中は、蚕における突然変異についても取り上げ、蚕の品種改良という「遠大の計」の一つに「突然変異を利用すること」⁵⁴⁾を挙げている。もちろん、突然変異自体は「生存競争上有利であるとかいう方向性を持つものではなく、全く無定向的に起こるもの」⁵⁵⁾であり、また、突然変異を利用して生物を人為的に選択して品種改良することと人間の個性の創造・発展とは決して同列に扱われるべきものではない。しかし、田中のような研究者とのやりとりから、有島は突然変異に関する知識を得て、前述のような人間論に至ったということも十分あり得るのではないか。この点については、田中義麿関係資料における遺伝学の講義に関する資料や、これまで有島との関係においてあまり注目されてこなかった小熊捍など他の研究者との交流も踏まえて、今後さらに検討を加える必要がある。

おわりに

本稿では、田中義麿『未央手記』において有島武郎を良き教員・同僚として記述しようとする意識が見られることを指摘した。日記研究者の田中祐介によれば、日記とは、未来の自己も含めた他者（読者）の眼差しから逃れることはできず、「日記の書き手は綴る出来事や感情を取捨選択して「見られても良い自己」「見せたい自己」を演出する」⁵⁶⁾書記空間であるという。『未央手記』においても、見られても良い・見せたい田中義麿自身そして有島を初めとする他者の姿が書かれているということになる。そして、田中の立場が学生から助手、助教授と変化していく間に、見られても良い・見せたいものの内容も変容していったはずである。田中はいかなる意識を持って日記をつけていたのか、その意識はいかに変わっていったのかについても明らかにする必要があるだろう。

このほか、『未央手記』には多くの読書記録も含まれており、近代日本の読書文化の研究にも寄与すると考えられる。今後の、本日記の翻刻・注釈の進展を俟ちたい。

[注]

- 1) 有島武郎は1907年12月5日に東北帝国大学農科大学予科英語講師に任じられて1908年1月6日に札幌に到着し、同年6月4日予科教授に任じられた。その後、1914年11月24日に札幌を離れ、翌年3月24日に辞表を提出して休職となり、1917年3月に休職期間が切れて退職となった。
- 2) 瀬沼茂樹「結婚前後の有島武郎——教授時代のうち——」（瀬沼茂樹・本多秋五（編）『有島武郎研究』1972・11、右文書院）、3-4ページ。

- 3) 『観想録』と題された有島武郎の日記のうち、第15巻(『有島武郎全集』12に収録)が1909年2月7日から1916年4月6日までの期間となっているものの、1916年を除いては断片的にしか記されていない。
- 4) 佐々木さよ『『宣言』論——自然科学との関連から——』(『文芸と批評』7(1)、1990・4)。
- 5) 有島武郎1914年2月6日付足助素一宛書簡(『有島武郎全集』13)、287ページ。
- 6) 『宣言』における突然変異説の表象については、拙稿「突然変異と恋愛の不確かさ——有島武郎『宣言』論——」(『層—映像と表現』16、2024・3)を参照されたい。
- 7) なお、小熊捍も「黒百合会二十五年回顧」(『虫の進軍』1946・10、北方出版社)、「蛇と有島さん」(『桃栗三年』1957・3、内田老鶴圃)などで教員時代の有島を回想している。
- 8) 山本美穂子「田中義麿日記「未央手記」をめぐって(一)——日露戦争下における札幌農学校予修科の学生生活」(『北海道大学大学文書館年報』17、2022・3)。
- 9) 田中義麿「寮の命名当時」(恵迪寮寮史編纂委員会(編)『恵迪寮史』1933・11、北海道帝国大学恵迪寮)、74ページ。
- 10) 田中義麿「或る時代の有島さん」(『文化生活』記念増大号 純真の人有島武郎、1923・9、『有島武郎全集』別巻、1988・6、筑摩書房)、772ページ。
- 11) 有島武郎「第四版序言」(『東方時論』1919・2-4、『有島武郎全集』7)、379ページ。
- 12) Yoshimaro Tanaka, "Genetic Studies on the Silkworm," The Journal of the College of Agriculture, Tohoku Imperial University, vol.7, no.3, pp.129-255, Jun. 1916. 以下、『東北帝国大学紀要』に掲載された田中の論文の日本語訳は、北海道帝国大学(編)『創基五十周年記念 北海道帝国大学沿革史』(1925・3、北海道帝国大学)所収の目録に拠る。
- 13) 田中の経歴については「田中義麿年譜」(田中義麿関係資料0458)を参照した。
- 14) 「学芸部報告」(『文武会々報』52、1907・12、89ページ)によれば、森本の講演「二万二千哩」は、「観察の犀利なるを以て優」れていたという。
- 15) 東北帝国大学農科大学予科教員時代の有島の住居の変遷については、前川久美夫『有島武郎の札幌の家』(1987・9、星座の会)に詳しい。
- 16) 札幌独立教会創立25周年記念祝会は1908年1月28日に開催され、有島が同教会の歴史を読み上げた。有島日記『観想録』(1908年1月28日、『有島武郎全集』11)にもこの祝会に関する記述がある。
- 17) 『観想録』(1908年3月8日、前掲書(16))にも同書を読んで涙を流すほど感動したという記述がある。
- 18) なお、田中は前年の寮歌「一帯ゆるき」も作詞している。この時期を回想した「一帯ゆるき 太虚の齢」(山口哲夫(編)『都ぞ弥生』1974・6、東京エルム会寮歌委員会、166ページ)には、「太虚の齢」の歌詞について次のような記述がある。

ところがここに一つ問題がある。それは第二節に「アゼンの春も夢なれや」の句があり、「アゼン」はギリシャの「アゼンス」の「ス」を字数の関係で省略したものである。[……]しかし有島さんは「アゼン」はアラビアの「アデン」と間違えるおそれありといわれたので、筆者もなるほどと考え「アゼン」を「アテネ」と直すつもりで、当時その意志を表明したように思う。ところが全く驚いたことに「恵迪寮史」には有島さんの心配されたことが実際となり「アデン」となっていた。これは非常に困るので、今後は是非とも「アテネ」に改めて欲しい。
- 19) 「開識社記録」(前掲書(9))、637ページ)によると、「今夜の会は新たに寄宿舎掛となられたる有島先生の歓迎会を兼ね」たもので、第一席の田中による「有島先生歓迎の辞」の後、第五席で有島が「米国学生の生活」と題する演説を行った。この記事に記載された演説の内容が『有島武郎全集』(1)に収録されている。
- 20) 『観想録』(1908年3月29日、前掲書(16))にも雪滑りに行った旨の記述がある。
- 21) 「学芸部報告」(『文武会々報』56、1909・3、74ページ)に次の記事がある。

▼通俗学術講話会 本部は学者に依て研究せられつゝある、日進の学術に対する新智識を、最

も通俗的に区民に聞かしむる目的で、一月十八日、十九日の両日午後六時から豊平館階上大広間に於て通俗学術講話会を開いた、両日の弁士並に演題は左の通りである。

十八日

- 一、開会の辞 農学博士 佐藤昌介君
- 一、札幌区区勢調査 農学士 高岡熊雄君
- 一、昆虫の彩色 理学博士 松村松年君

十九日

- 一、独逸学生生活 文学士 溝淵進馬君
- 一、バクテリアの話 理学博士 宮部金吾君

出来るだけ多数の人々に聞かせ度いのは山々であるけれど惜けないことには札幌には夫れ丈け大きな広会場がない、豊平館では三百人精々である、仕方がないから聴衆を制限するために聴講券を出し、南一条の相沢商店と北三条郵便局との二ヶ所に頼で、成る可く一人一枚に限る様にして無料で渡して貰た。それに両日の景気は非常なもので少しでも定刻を遅れて来た人は入場を断らざるを得なかつた位である、定刻六時となるや有島部長司会の下に開会、[…]

22) 義「生」(『文武会々報』56、1909・3、15ページ)の結論部分は次の通りである。

以上述ぶる所的事实に徴して考へて見ると結局「生命」なるものが所謂生物に特有のものではなくて宇宙万物に共通のものである即ユニヴァーサルのものであると云ふ結論の到着するものである、之が即「生物学的一元論」の根本思想であつて苟も此の事実と矛盾するやうな哲学や宗教は到底永く存在の権利のないものである現に之は欧米諸国に於ける宗教界の現状に照しても明な事実である、吾々多少科学的頭脳を有する者は蠱の生えた目的宇宙観や原始的迷信の産物たる物心二元論に迷はされて不健全な思想を懐く様の事のないやうにしたいものである、予輩が茲にヘッケルの学説の一部を紹介して諸君の注意を喚起せんとするのも実は此意に外ならぬのである

23) 「開識社記録」(前掲書(9))によると、小熊は1908年1月7日の第32回開識社にて「科学的生命観」を、同年11月20日の第37回開識社にて「死の研究」を演説した。

24) 「開識社記録」(前掲書(9)、642-643ページ)に次の記述がある。

最後の有島先生の演説の大要は、科学界が古来数度の大打撃を宗教界に与へたり。然れども科学の最も進歩せる今日、尚ほ種々の点に於て神なる存在を離れて解釈することを得ず。然もこれ迄受けたる大打撃の大部分は、却つて宗教界にとり幸福な結果を表はせり。今日の大打撃たる進化論の如きも、或いは又宗教界にとり却りて幸福とならざるなきを保せず。要するに宇宙間の現象は、之を科学的に言ひ得ずして、神鳴る考を得て始めて理解し得るものなりと。／次に田中義磨君が之に就いて弁駁的質問演説をなし、先生又之に対して弁解する所ありたり。

25) 土家生「刹那」(『文武会々報』57、1909・6、73-74ページ)は次の通りである。

君が眼と、眼と逢ふ刹那時じくも／胸の潮は鞆鞆と、風なき恋の岸による。／／吾君が頬に頬をふる、その刹那／あゝら不可思議暗黒の、大海原に／一角ゆ、むら／＼起る紅の／雲の中より赫灼と、光をひいて天華ふる。／／君白き、腕のべて吾をまき／我が胸に、胸よせ給ふその刹那／疲れし霊は翻々と、しばしば甘きそよ風の／呼吸の中によみがへる、／かゝらんおりぞふとも聞く、愛欲の／潮にゆられ御胸の、極秘の水泳を急ぎ来る／見なれし船の帆のひゞき／我が船の帆に共鳴るを。／／やがてまた、よどめる春の香にむせぶ／花のひゞきか、あらず一つの唇もる、／「吾君を愛す」とばかり、その刹那／故なき涙君が頬と、我が頬を落ちて／地にぞ咲く、燦爛たりや夢の花。

なお、有島と飯塚直彦および大石泰蔵の関係については、内田真木「有島武郎と山本宣治——高倉つう・土田杏村との交流から——」(『有島武郎研究』22、2019・5)が考察しており、有島と山本宣

治の交流に飯塚が関与していたという。

- 26) 「ブランド」はイブセンの戯曲『ブラン』を紹介しつつ有島自身の文明論を展開したものであった。このほか、以下のドイツ語教員により西欧文学が紹介された。すなわち、詩人でもあった秋元喜久雄（号・蘆風、1907・9-1910・8在任）、『帝国文学』などに小説や戯曲を発表していた吹田順助（1907・9-1915・9在任）、恵迪寮の雑誌『辛夷』の母体となった学生の文芸団体・凍影社に指導を行った佐久間政一（1910・9-1914・8）である。

- 27) 「例言」（東北帝国大学農科大学文芸会学芸部（編）『東北帝国大学農科大学』1910・5、富貴堂書房、1-2ページ）に次の記述がある。

本書の出版に際し、宮部金吾、八田三郎、森本厚吉、田中稔四君は重要な材料を供せられ、有島武郎、仲尾政太郎、伊藤静栄、大石泰蔵、加藤茂雄の五君は編輯の任に当つて、各々熱心に従事せられ、表紙は小熊樟君を労はした。尚田中義麿、藍野祐之諸君の助力に負ふ所最も多い。こゝに記して感謝の意を表する。

なお、同書の構成は以下の通りである。

第1章本学の過去

第2章組織

第3章職員

第4章建物及土地財産 1、講堂実験室及付建築物 2、植物園 3、博物館 4、農場 5、演習林 6、臨海実習所 7、寄宿舎

第5章各科の現状 1、農学科 2、農芸化学科 3、大学予科 4、農学実科 5、土木工学科 6、林学科 7、水産科

第6章本学に於ける諸会 1、文芸会 2、札幌農林学会 3、札幌博物学会 4、カメラ会

第7章出身者の現状

第8章本学と北海道 1、概論 2、風物 3、気候 4、社会 5、学術上より観たる北海道 6、実業上より観たる北海道 7、結論

第9章札幌の学生々生活 1、天然と自然 2、寄宿舎生活 3、学生々生活費調べ

附録 入学志願者心得

また、「編集部より」（『文芸会々報』60、1910・6、112ページ）に次の記述がある。

此出版に就ては編輯者等は随分忙しい思をした者で有島先生の御宅で徹夜したとさへある。其時は皆他力で徹夜したので大分笑はされる様なことが多かつた。

- 28) 山本美穂子前掲論文（8）。

- 29) この日の日記の記述を元に、後年田中は「ダーウィン進化論50年記念会のことも」（丘英通（編）『ダーウィン進化論百年記念論集』1960・3、日本学術振興会）という記事を書いている。

- 30) なお、後年の田中の評論「結婚を語る」（『遺伝・人生・随想』1943・10、三省堂、8-9ページ）に次のような記述がある。

試験結婚（トライアル・マリーゼ）の名を筆者が初て耳にしたのは既に三十年前で、それは故有島武郎氏の口からであつた。

- 31) 小熊の評論、「千里眼を馬尾蜂にて説明するの愚」、「千里眼と馬尾蜂（再論）」、「所謂馬尾蜂透視問題の結論」は『虫の進軍』（前掲書（7））に収録されている。これらの評論で小熊は自身による観察を通じて、ウマノオバチが樹木に潜り込んで寄生するのを動物における千里眼だとした丘浅次郎を批判した。また、『文芸会々報』（61、1910・12）には、千里眼事件に関する評論として、冷たい人「精神学と迷信学」、BBB「心靈現象研究の態度」が掲載されている。

- 32) 木田金次郎「先生を憶ふ」（『生れ出づる悩み』と私』1994・8、北海道新聞社）、16ページ。また、S、A生（藍野祐之）「黒百合会」（『文芸会々報』62、1911・3、64ページ）には、この第3回展覧会は

原田三夫が多数の作品を送ったことと、有島の「有珠の煙」を初めとする作品により、「兎に角本回は原田君と有島先生の踏台であつた」と記されている。なお「有珠の煙」は、現在北海道立文学に所蔵されている「有珠無名谷の煙」と推測される。この絵は海上から有珠山方面を眺めたもので、空は暮れかかっている。

- 33) 田中は、「序」（『遺伝学』1934・5、裳華房、1-2ページ）で次のように述べている。

元来著者は大学を卒業する迄は将来遺伝をやるとは思はなかつた。それが斯学の門に入るに至つた動機は、全く恩師八田三郎博士がその頃新に出版になつたベーツソン BATESON の「メンデルの遺伝の法則」MENDEL's Principles of Heredity を動物学教室の雑誌会に於て講演するやう命ぜられたのに在る。筆者は今なほ二十余年前の當時を追懷して殆ど偶然とも云ふべきこの機縁に感謝せざるを得ない。

このほか、同時期に田中は未央盧人の名で伝記「グレゴール、メンデル」を『文芸会々報』（63、1911・7、同64、1911・12）に寄稿している。

- 34) 武者小路実篤「札幌より」（『白樺』1911・6）および「編輯室にて」（同）に、札幌で有島に会ったことが書かれている。

- 35) この客車は現在、鉄道博物館（さいたま市）に保管・展示されている。

- 36) 浜口熊岳の札幌滞在については、「熊岳の自由術 天一的な療治パーパー / \」（『北海タイムス』1911・10・4）という記事が、「世間が評判して為体の分らぬといふ浜口熊岳が去る二日より一週間区内新善光寺に於て患者の施療をする」と報じている。

- 37) この生徒は、長野県出身であり黒百合会の発起人の一人でもある塩沢梅之助と推定される。塩沢は1916年7月、東北帝国大学農科大学畜産学科を卒業した。

- 38) 田中は「生物学寄宿舎観」（『辛夷』1、1912・4、13ページ）において、寄宿舎を次のように論じている。

寄宿舎と云ふ第三次有機体の内部にも矢張 Kampf der Teile の存することは免がれぬであらうが、其の競争が常に寄宿舎自体の発達を主眼とする様になりさへすれば、此の団体の有機的結局は益々鞏固となり、寄宿舎存立の趣旨と益々明になるであらうと思ふ。

なお、『辛夷』には有島および田中のほか、吹田順助、佐久間政一などの教員も寄稿している。

- 39) 「学芸部報告」（『文芸会々報』70、1913・12、42ページ）に次の記述がある。

三月一日経済学講堂に於て講演会を開く／超科学的傾向を哲学的に最初にあらはせる者ベルグソン哲学に就きて有島教授の批評的講演あり会するもの無慮八十名皆驚異の眼を瞪れり。

なお、有島はこの時期に『創造的進化』の読書ノート「Creative Evolution 梗概」を執筆するとともに、ベルクソンからの影響を示す評論「ワルト・ホキットマンの一断面」（『文芸会々報』69、1913・6）、「草の葉（ホキットマンに関する考察）」（『白樺』1913・7）を発表している。

- 40) 有島武郎1915年11月16日付末光信三宛書簡（前掲書（5））、338ページ。なお、有島の子供観については、田辺健二「有島武郎の教育観」（『有島武郎試論』1991・1、溪水社）に詳しい。

- 41) Yoshimaro Tanaka, "Studies on the Anatomy and Physiology of the Silk-producing Insects: I. On the Structure of the Silk Glands and the Silk Formation in *Bombyx Mori*," The Journal of the College of Agriculture, Tohoku Imperial University, vol.4, no.2, pp.145-172, Aug. 1911.

- 42) Yoshimaro Tanaka, "A Study of Mendelian Factors in the Silkworm, *Bombyx mori*," The Journal of the College of Agriculture, Tohoku Imperial University, vol.5, no.4, pp.91-113, Mar. 1913.

- 43) Yoshimaro Tanaka, "Gametic Coupling and Repulsion in the Silkworm, *Bombyx mori*," The Journal of the College of Agriculture, Tohoku Imperial University, vol.5, no.5, pp.115-148, Mar. 1913.

- 44) Yoshimaro Tanaka, "Occurrence of Different Systems of Gametic Reduplication in Male and Female Hybrids," Zeitschrift für Induktive Abstammungs- und Vererbungslehre, vol.14, pp.12-30, Dec. 1915.

- 45) Yoshimaro Tanaka, “Further Data on the Reduplication in Silkworms,” The Journal of the College of Agriculture, Tohoku Imperial University, vol.6, no.1, pp.1-16, Mar. 1914.
- 46) Yoshimaro Tanaka (田中義麿), “Sexual Dimorphism of Gametic Series in the Reduplication (生殖細胞式の雌雄二型),” 札幌博物学会会報, vol.5, no.2, pp.61-64, Jun. 1914.
- 47) 田中義麿前掲論文(10)、772ページ。
- 48) なお、同日記巻末の「金銭出納録」欄に、9月20日付で『文化生活』から原稿料5円が入金された旨の記述がある。
- 49) 田中義麿前掲論文(10)、773ページ。
- 50) 当時、恋愛論が流行するとともに、1921年7月の哲学者・野村隈畔の情死を初めとする恋愛事件が話題となっていた。これらの動向については、菅野聡美『消費される恋愛論 大正知識人と性』(2001・8、青弓社)に詳しい。
- 51) 川鎮郎「有島武郎とキリスト教——研究史的に」(『有島武郎とキリスト教 並びにその周辺』1998・4、笠間書院)。
- 52) 宮野光男「教会退会後の自然観をめぐって(一)」(『有島武郎の文学』1974・6、桜楓社)、81ページ。
- 53) 宮野光男前掲論文(51)、86ページ。
- 54) 田中義麿『蚕の遺伝と品種改良』(1917・7、大日本蚕糸会)、242ページ。
- 55) 田中義麿『基礎遺伝学』(全訂第24版、1972・4、裳華房)、141ページ。
- 56) 田中祐介「『日記文化』を掘り下げ、歴史を照射する」(田中祐介(編)『無数のひとりが紡ぐ歴史 日記文化から近現代日本を照射する』2022・3、文学通信)、25ページ。

【附記】

引用文中の旧字体は新字体に、変体仮名は現行の平仮名に改めた。引用文中の傍線・傍点は原文のままである。また、有島武郎のテキストは筑摩書房版『有島武郎全集』(1979・11-1988・6)に拠った。なお、引用文中の「／」は改行を、「／／」は行アキを、「[……]」は省略を示す。

『未央手記』翻刻に従事された小田島良氏より、同日記に有島武郎に関する記述があることをご教示いただいた。本稿は有島武郎研究会第75回全国大会(於・新宿歴史博物館)における口頭発表「有島武郎と田中義麿の交流——新資料・田中義麿日記『未央手記』から——」を基にしている。小田島氏ならびに学会にてコメントを下された方々、北海道大学大学文書館の皆様に厚く御礼を申し上げます。

(なかむら たける／北海道大学大学院文学研究院専門研究員)